

無文帯に「人」字状（15）あるいは「C」字状（16）の縄線文を施す個体が確認されており、同様の関連性をうかがわせる。これまで、天祐寺式新手の特徴である文様帯の収斂ならびに口縁部無文帯の作出には大木系の影響が想定されてきたが、同一・近接遺跡出土の在地系・大木系およびその折衷型式の3系統に共通した特徴が見出せたことはその関係性を追認する上で大きな意味をもつものと考えられる。その一方で、本遺跡における在地系の土器群と大木系の土器群における相関関係を見出せるのはこれらに関連する一部要素に限定されるのもまた事実である。例えば大木系の胴部に展開する充填縄文・磨消縄文・沈線文等からなる装飾要素を付与する個体はIV群A類1種に帰属する個体の中にはみられなかった。IV群A類2種に属する個体も総体に対して少数であり、時間的に遷移するなかで、両土器群の相関関係が一定かつ継続的であったとは判断し難い。

以上のように、本遺跡における後期初頭土器群においては、在地系と大木系の二系統の確認とその相関の様態において一定の整理・把握が可能であった。だが、必ずしもこれが同時期遺跡すべてに適用が可能なものとは考え難い。今後他の各遺跡でも同様の資料分析が行われ、比較検討によりいわゆる「涌元式」に総称される該当期の曖昧模糊とした土器群相の詳細な把握とともに、縄文時代中期から後期への遷移期における当地の文化様相を繙く端緒となれば幸いである。（時田）

（3）土製品

本遺跡出土の土製品には、土偶・環状土製品・匙状土製品・舟形土製品等がある。土偶類については1点を除き板状土偶およびそれに類する形状をもつものであり、これらは全て縄文時代中期・円筒上層式期に帰属するものと推定される。頭部を欠損するものが多いが遺存するものについてはいずれも顔面表現が見られなかった。これは、近接する茂辺地4遺跡における板状土偶においても共通してみられた特徴である。また、脚部先端を爪先・踵を有する足裏状に成形する例も複数個体みられており、当地における土偶製作における共通事項であったものと推定される。この他、全長全幅いずれも3cmに満たない極小の菱形土偶も出土している。腕部尖端を貫通する横孔が穿たれており、垂飾品としての機能を有していたものと推定される。板状土偶腕部ならびに腋下部には貫通する孔が穿たれる例がままみられるが、それらの機能を類推する上で参考となる事例といえる。

土偶以外で特記すべきものとしては、器面に刺突文の加えられた2点の環状土製品があげられる。いずれも支沢始端の窪地周辺で包含層中より出土しており、列状を呈する刺突文の様相から、周辺で多量に出土している円筒上層式前半期に相当する資料であろうと推定される。2点のうち、小型のものについては表裏2面のうち一方にのみ刺突列が施され、もう一面は無文であり平滑・顕著な調整が加えられている。刺突列を施す面には突起が付与され、その基部に貫通孔が穿たれていることなどから垂飾品としての機能が推測される。一方、もう一点である大型のものについては、表裏両面に刺突列が施され、突起・穿孔ともに有さない。

これらに類した環状土製品は北海道南部に所在する他遺跡でも類例がみられる。それらについて、該当遺物ならびに共伴する又は同一層より出土する資料について抜粋・図示し、加えて地図上に遺跡位置をプロットしたものが第IV-7図である。共通する特徴としては、突起・穿孔等の垂飾機能に係る成形がなされるものについては装飾は片面にのみなされ、単純に環状を呈するものについては表裏両面に装飾が施される。いずれも円筒上層式前半期・円筒上層a～c式が伴うことから、当該時期・地域における定型的な垂飾品のひとつであった可能性が考えられる。（時田）

（4）剥片石器

剥片類は、平成25・26年の2ヵ年の調査により総点数にして11,358点が出土している。うち素材・剥片（V・VI群）などを除く剥片石器は3,167点で約28%を占める。遺構からの剥片類の出土点数は1,264点で全体の約11%、うち剥片石器は60点で同類全出土数の2%未満に留まる。

調査区全体での出土状況は支沢始端部周辺から北西側緩斜面上に集中的に分布する。これは、土

